

踏み跡 < My mountains >

日光	表尾根縦走	No. 131
----	-------	---------

昭和 44年 8月 16日

浅草駅集合 7時 55分。早朝なのに特急がとれず、やむなく 8時 09分の快速に乗車。夏休み中の日光方面はやはり混雑がひどい。メンバーは石関と井口。電車は満員、外は快晴。

鹿沼付近までは風も少なく車内は熱気ムンムン。

日光着は 10時 20分。海拔 700m、風がひときわ涼しい。しかしそれにしても人が多い。バスを待つ間に昼食。

バスは 11時 31分 発霧降高原行、これまた超満員。暑い電車にうんざりした後に暑いバスで約一時間。狭い悪い道を通り抜けて海拔 1200m の霧降高原に到着。

冬はスキー場として使うリフト三基を乗り継いで小丸山へ。リフトの下は夏の終わりを飾る花、クルマユリ、オニアザミ、アマニュウ、ウサギギク、シモツケソウ、コガネギク、ヤマハハコ、ソバナ……。

小丸山、海拔 1600m、下界の暑さとは変わって霧の中の涼しい高原。右手に丸山を見ながら赤薙山に向かって出発。つい最近まではこのコースは、日光駅から霧降高原まで一日かけて登りつめなければならなかった。今ではバスとリフトを使って海拔 1600m まで達することができる。そのためか、このあたりの賑わいは「山」のムードではなくハイキング、ピクニック、散歩、旅行といった感じで、華やかさが支配している。しかし、30分も登り丸山付近まで来ると周囲は静かになり、登山者だけの世界になってくる。



真夏とはいえこの高さまで来ると、汗に濡れた体が 5 分間の休憩の間にひんやりしてくる。

人の気配が途絶えたところで、赤薙山への急登に備えて二回目の昼食(パン、火腿、トマト、ジュース)。

リフトで高度を稼いだせいかなかなか調子が上がらず、赤薙山への登りがきつい。登るにつれて、都会で背負い込んだ悪い物質が汗腺から噴き出して段々に山に人間になっていくように感じる。その変化の時、つまり入山第一日目の登りが一番苦しい。しかしながら、これが登山の持つ面白味のひとつなのではないだろうか。

赤薙山まで登りつめてほっと一息ついていると下ってくる人と出会った。聞いてみると、独標の水場は水も豊富で幕営もできそうだと言う。これで今日は女峰まで行かずに済む。

独標の下の水場に着いたのは 16 時。水は豊富だし天幕場は数張分ある。片隅にすでに一張りあるので、もう一方の隅に幕営。日光の町中の雑踏とは別世界、鳥の鳴き声しか聞こえないような静寂がうれしい。何か喋るのにも声をひそめなければ・・・と思うような静かさだ。天幕の周囲はアマニュウとシシウドが 1mほどに伸びて化け物のようにはびこっている。

夕食は、最近発売されたボンカレーの試食会。「牛肉 100% 野菜入り」という誇大広告ぶりには一同啞然。

昭和 44年 8月 17日

起床 4 時、天気快晴、気分良好。朝食はジャガイモとワカメのみそ汁にハムエッグ。

ゆっくり片付けて 6 時 25 分に出発。朝一番から岩場が多い一里ヶ曾根の登り。

それでも一時間で女峰山に辿り着いた。

昨日は霧で何も見えなかったが、今日ここまで来るとこんなに見えるのかと思うぐらいによく見える。昨日登った赤薙山はずっと下の方に、そしてこれから行く帝釈、小真名子、大真名子、男体山、……。何と言っても男体山の大きさには驚く。ここと比べて標高差は 20m 程度しかないのに、その裾野の広がり山を一層大きく見せている。地図で見てもわかるように小真名子山と大真名子山も男体山同様に円錐型をしていて、あたかも男体山に

踏み跡 < My mountains >



女峰山への登り道から表尾根の眺め

付く付き人のように見える。大谷川をはさんで南側には鹿沼方面の低山の無数の連なり。男体山の向こうには皇海山、庚申山と連なる山波。鬼怒沼山や尾瀬方面の山、会津、那須、谷川・・・、およそ関東地方の山々はほとんど見渡すことができる。小さな祠のある岩の上でスケッチブックとカメラを用意して、しばしの休息。帝釈山は小さな突起で、うっかりすると気付かずに通過してしまいそうなところ。そして400mの大下りで富士見峠。日光から奥鬼怒へ抜ける林道を渡って、再び山の中へ入り、再び300mほど登り返して小真名子山、そして大真名子山。昼になると男体山はその全容をガスの中に隠し、わずかに頂上付近と裾野の広がりだけしか見せてくれない。

「真名子」は、古語の「愛子(まなこ)」からきているのではないか。男を表す男体山と女を表す女峰山、その間に座して帝釈天に見守られている子どもたちと解釈してみると面白い。



女峰山頂上 (右は井口)



御前山中学校の生徒との交歓
(中央 石関)

志津峠まで来るともう海拔1700m台になってしまう。白樺の入り混じった林の中に志津小屋が建っている。茨城県の御前山村から来たという中学生二人と雑談しながらゆっくりと最後の休憩をとり、三本松へ向かって下山。

これで、前から目をつけていた日光表尾根を歩くことができた。時間があれば男体山へも思っていたが実現しなかった。一度は厳冬期に入ってみたい山、それが日光の山である。

以上